国立代々木競技場第二体育館の可能性についての研究
～アリーナに求められる条件とＪＢＬ・ｂｊリーグの観客動員数に着目して～
A study of possibility of Yoyogi National 2nd Gymnasium
～from requirement of a arena and the number of spectators in JBL and bj-league

1K06B002　　穐鹿　寛治
指導教員　主査　倉石　平先生　　副査　間野　義之先生

［緒言］

日本のトップスポーツは戦後、企業スポーツという形態で発展し、今日までの長い間、企業がスポーツチームを保有する形でスポーツを支えてきた。企業は社員の健康増進や福利厚生、または企業の対外的な宣伝効果を名目として、お金をかけて運動部を持つようになり、企業が選手を雇用し、職場の仲間が応援し、取引先が支援してきた。このように、企業スポーツにとってよき時代が存在した。しかしながら、バブル崩壊に始まる不況の波は、企業の意識をリストラによる経営のスリム化や財務体質の強化へと向かわせた。そして、企業スポーツが担っていた福利厚生や社員の士気高揚といった役割や、企業の対外的な宣伝効果としての役割を低下させ、多くの企業スポーツチームが休部や廃部へと追いやられた。こうした企業スポーツの衰退がさけばれる一方で、行き詰った企業スポーツのチームやリーグが独自で採算をとるために、チームの事業化、リーグの事業化などに踏み切る動きが多く見られる。プロスポーツの主な収入源には、放送権料収入、入場料収入があげられるが、今後は、ビジネスの根幹ともいえる集客による入場料収入の確保がポイントといえるが、それに対応したアリーナが現れていないのが現状である。そこで、今なおバスケットボールの聖地として活躍している国立代々木競技場第二体育が、プロスポーツとしてのバスケットボールにふさわしいアリーナであるか検討したいと考えた。

［研究の方法］

①日本バスケットボールリーグの「ＪＢＬ試合運営マニュアル２００９－２０１０」に記されたアリーナ要件を元に、国立代々木競技場第二体育館がその要件を満たしているか調査する。②ＪＢＬとｂｊリーグの活動と平均観客入場者数のデータから、今後の推移を推測する。これらの結果から、今後、国立代々木競技場第二体育館がプロスポーツのアリーナとして役割を果たすことができるか見極める。

［研究結果］

①観客収容可能人数は３，２０２席であり、ＪＢＬの求めるアリーナ要件を満たしている。音響設備は、常設してあり、照明の尺度も、最大２、０００ルクスとアリーナ要件を満たしている。②ＪＢＬの観客動員数は、２００８－２００９シーズンに過去最高の２，１２３人を記録し、増加傾向にある。ｂｊリーグの観客動員数は、２００８－２００９シーズンにおいて、東京アパッチに増加傾向が見られるものの、リーグ全体では、減少している。

［考察・結論］

国立代々木競技場第二体育館の客収容可能人数は３，２０２席であるが、消防上、選手・スタッフを含めた収容可能人数であることや、

ＪＢｌ、ｂｊリーグが今後、観客動員数を増加させていく傾向が見られるため、３，２０２席では不足すると考えられる。また、音響設備と照明設備もアリーナでのプロスポーツエンターテイメントを作り上げる設備とは言えず、バスケットボールの興行として利用するためには、整備が必要になると考える。これらのことから、今後、国立代々木競技場第二体育館はプロスポーツとしての発展が期待されるバスケットボールのアリーナとして、役割を果たせなくなることが明らかとなった。